食事規範の伝承に関する研究

田　島　真理子*・橋　口　尚　宝**・大　富　あき子***

(2005年10月18日　受理)

A Study of the Transmission of Japanese Traditional Table Manners

TAJIMA Mariko・HASHIGUCHI Syouhou・OTOMI Akiko

要　約

食事に関わる規範として伝統的に嫌い箸とされる拾い箸，迷い箸，涙箸などの16種の箸の扱い，および箸の持ち方や食事の挨拶など食事中の規範14種をとりあげ，それらを教えられた経験があるか，また次の世代に伝承したいと考えるか，小学生，大学生，中高年を対象にアンケート調査を行った。その結果，小学生では，嫌い箸４種について５割以上が教えられた経験をもち，大学生，中高年では６～７種の嫌い箸について７割以上が教えられた経験をもっていた。半数以上が伝承したいとする嫌い箸は，大学生では11種，中高年で８種であった。一方，食事規範については，肘をついて食べない，口に食べ物を入れたまましゃべらない，箸の持ち方使い方，挨拶をする，食べ残しをしない，茶碗や皿の持ち方の６項目について，大学生，中高年ともに半数以上が指導された経験をもち，小学生では６割以上であった。また，これらの項目については，大学生，中高年とも６～８割が伝承したいとしていた。

キーワード：嫌い箸，規範，食文化，食生活，食事作法

１．諸言

食事には，生命の維持，発達，健康維持など栄養に関わる重要な働きと同時に，社会的な働き，つまり，食事を共にすることによって，家族の団欒や人間関係の親密度や信頼関係を高める働きもある。五十嵐ら[1)]は家族が食事をともにする場は，子供にとってはもっとも身近な食習慣形成の場であり，食物・食事に関する伝統的技術や知識，食文化の伝承の場となると述べている。しかし一方で，現代の食生活は，価値観の多様化と相まって伝統的食生活とは異なるものとなりつつある。

*　鹿児島大学教育学部
**　熊毛郡南種子町中平小学校
***鹿児島純心女子短期大学生活学科

平成５年の国民栄養調査成績[2]をみると，「夕食をだれと一緒に食べるか」という問いに対する回答として「子供だけで食べる」が昭和57年の3.9%から4.3%に上昇し，「両親と一緒に食べる」が57年調査と比べ8.9%減少して55.6%となってなり，孤食が進みつつあることを示している。また，家族内で異なる内容の食事をする個食も増えてきているといわれる。石毛[3]はこのことは，他者の視線を気にせずに自己流の食事が可能な食べ方であると述べている。現在，食教育の必要性が大きく取り上げられているが，食の社会的働きに視点をおいた食教育もまた必要であろうと思われる。家族やその他の人々との共食において周囲に不快感を与えない食事の仕方を従来，しつけとして子供たちは教わってきた。そこで，本研究においては，家庭生活における食事規範を取り上げ，規範の指導がどのように変化してきているか，また，多様化した食生活の中で，伝統的な食事規範は現在，家庭でどのように受け止められているか，今後の食教育の方向性をさぐることを目的に調査を行った。

２．調査対象および調査方法

（１）　調査対象

調査対象は，鹿児島県内に在住する小学生，大学生，および中高年層とした。小学生については，都市部および郡部の小学校各１校を選び，食事作法や箸の持ち方等についてすでに家庭において教えられていると考えられる５年生，６年生を対象とし，計256名（男子133名，女子123名）について調査を行った。大学生は，鹿児島大学学生（18～26歳）104名（男性44名，女性60名），中高年層は30歳代後半から70歳代前半の98名（男性41名，女性57名）を対象とした。

（２）　調査方法

調査は2003年12月から2004年１月に，アンケートにより行った。なお，小学生へのアンケートにおいては，家庭に持ち帰らず学級での回答を依頼し，自記入直接回収とし，大学生および中高年層については，留置法によった。

（３）　調査内容

調査内容は，①嫌い箸を教えられた経験の有無，②箸の置き場所（配膳位置），③各食事規範について教えられた経験の有無およびその伝承の必要性に対する意識，④回答者の属性（居住形態，家族構成，年齢）などである。食事規範の伝承に関するアンケートは大学生および中高年のみとした。

嫌い箸については，以下の16種について調査した。①横橋；箸についた料理を口で横にもぎ取る，また，箸をスプーンのように使うこと　②ねぶり箸；箸先を口に入れてなめること　③せせり箸；箸で歯の間をせせること　④寄せ箸；器を箸で引っ掛けて引き寄せること　⑤迷い箸；どれにしようかと箸をさまよわせること　⑥にぎり箸；箸を握ったまま片手で器などを持つこと　⑦さぐり箸；料理の下のほうから食べたいものを取り出そうとすること　⑧刺し箸；料理を箸で刺して取ること　⑨移り箸；一度箸をつけた料理を食べずに，他の料理へ箸を移すこと　⑩込み箸；箸で食べ物を口

に詰め込むこと　⑪かき箸；食器に口をあて箸でかき込む，または箸で身体を掻く　⑫叩き箸；箸で器などを叩いて音を出すこと　⑬涙箸；箸の先から滴を落とすこと　⑭渡し箸；器に箸を掛け渡して休ませること　⑮くわえ箸；箸を口にくわえること　⑯拾い箸；箸と箸で料理を渡し合うこと。なお，小学生を対象にした調査では嫌い箸の名称は付さず内容説明のみとし，大学生，中高年層に対しては名称・内容の両方によって示した。

食事規範についての調査は，以下の14項目とした。①食事中は静かにする　②「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶をする（以下，挨拶をすると略す）　③口に食べ物を入れたまましゃべらない（口に入れたまましゃべらないと略す）　④汚い話や不愉快な話はしない　⑤口を開けたままものを食べない　⑥食べ残しをしない　⑦舌打ち，音をたてて食べない　⑧背筋を伸ばして姿勢良く食べる（以下，姿勢よくと略す）　⑨肘をついて食べない　⑩床に座る場合は正座をする（以下，正座でと略す）　⑪食べる順序　⑫ご飯や味噌汁の並べ方　⑬箸の持ち方や使い方　⑭茶碗や皿の持ち方。アンケート結果の集計は，SPSS13.0によった。

3．結果および考察

（1）　嫌い箸について教わった経験の有無について

各種の嫌い箸について教わった経験がある小学生の割合を図１に示した。嫌い箸は箸の使い方の

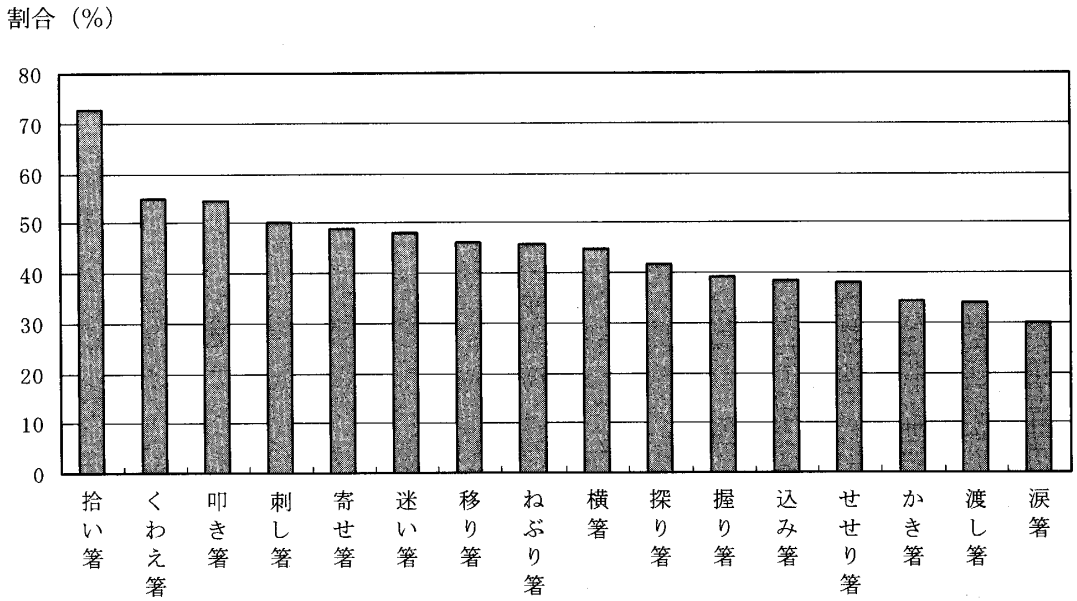

図１．各嫌い箸について教えられた経験がある者の割合　－小学生－

中で，一般にしてはならないとされる使い方であるが，最も教わった経験がある者の割合の高かった嫌い箸は拾い箸で73%，最も割合が低かったものは涙箸で30%であった。半数以上の小学生が教わった経験のある嫌い箸は，拾い箸，くわえ箸，叩き箸，刺し箸の４種類であった。このうち，拾

い箸は，宗教的意味合いをもつが，他の嫌い箸に比べて教わった割合が大きく特徴的であった。

次に大学生の中で，嫌い箸について教わった経験のある者の割合，および次の世代へ伝承したいとする者の割合を図２に示した。大学生においても，教わった割合の最も多い嫌い箸は拾い箸と迷

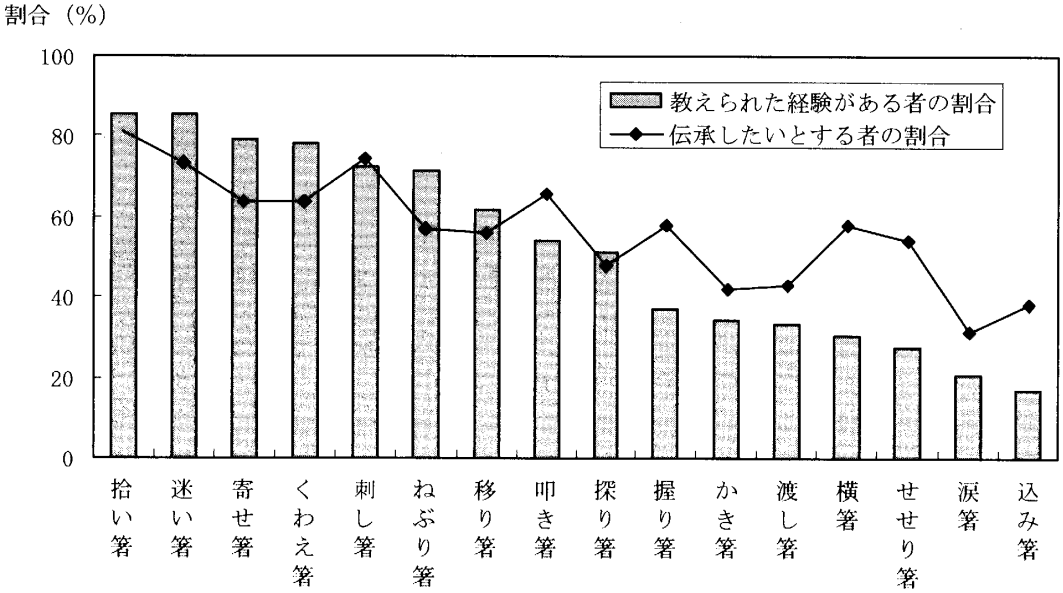

図２．各嫌い箸について教えられた経験がある者の割合およびその伝承意識について　－大学生－

い箸で86%と非常に高い割合であった。ついで，寄せ箸，くわえ箸，刺し箸，ねぶり箸の順でいずれも70%以上が教わった経験があるとしていた。また，半数以上が教わったことがあるとする嫌い箸は９種で小学生の４種に比べて大きく増加していた。これは，成長につれて教わった嫌い箸の種類が増加していくのか，つまり教わる機会が増えるのか，あるいは時代の変化に伴う嫌い箸に対する意識の変化によるものであるか今後検討を要すると思われる。一方，伝承したいとする嫌い箸は，拾い箸が最も多く，次いで刺し箸，迷い箸，叩き箸，寄せ箸の順であったが，教わった経験をもつ者の割合が低い嫌い箸でも，伝承したいとする割合が教わった割合に比べて20%以上高い嫌い箸としては握り箸，横箸，せせり箸があった。

中高年層の嫌い箸について教わった経験のある者の割合および伝承したいとする者の割合を図３に示した。認識率の最も高い嫌い箸は迷い箸で80%，次いで拾い箸で77%，くわえ箸およびねぶり箸75%，移り箸72%，寄せ箸71%，刺し箸70%の順であった。教わった経験がある者の割合が50%以上の嫌い箸は，大学生の場合と同じく９種で，その種類も大学生と同じであった。

教わったことのある嫌い箸について，上位８種は小学生，大学生，中高年層で全く一致しており，迷い箸，拾い箸，くわえ箸，ねぶり箸，移り箸，寄せ箸，刺し箸，叩き箸は，世代を超えて実際に伝承されてきている嫌い箸と考えられる。一方，渡し箸，涙箸，込み箸は，教わっている割合，伝承したいとする割合ともに低く，実際の食事においてあまり意識されずに行われていると推測され

る。

（2） 箸の配膳位置について

嫌い箸の１つに箸を食器に掛け渡す渡し箸があるが，先に見たように渡し箸の認識率は低く，また伝承すべき嫌い箸としてもあまり認識されていない。箸の持ち方については，これまで様々な報告[3)4)5)]があるが，箸を食膳のどこに配置しているかについては報告がない。伝統的な箸の取り上げ方は，右手で箸を取り上げ，左手で，箸の下からそえて持ち，右手を滑らせて箸の下から受けるように右手の向きをかえて箸を持つものであるが，箸の置き方は，この箸を持つときに持ちいい，自然な動きのできる位置に横に置かれる[6)]。一方，西洋料理では，ナイフ・フォークは料理の両脇に先を向うに向けて配置され，中国料理でも通常縦に置かれる。箸やナイフ・フォークの配膳は，その国の食文化・マナーに関連している。そこで，実際の食生活において箸をどのように置いているか，飯・汁を配置した膳の図にその置き方を図示するよう求めた。結果を表１に示した。伝統的

表１　箸の配膳位置

箸の配膳位置	割合（%）		
	小学生 N=239	大学生 N=101	中高年層 N=89
手前左向き	77.8	72.3	83.1
手前右向き	19.5	10.9	3.4
茶碗に乗せる	2.1	8.2	1.1
茶碗の奥に置く	0.4	0.0	0.0
横に置く	0.4	2.0	3.4
置かない[注1]	－	7.1[注2]	9.0[注3]
計	100.0	100.0	100.0

注１　食事中に箸を置くことがないと答えたもの，なお，小学生では「置かない」という選択肢は設けなかった

注２　実数７名のうち，６名は置くとすると手前左向き，１名は手前右向きとした

注３　実数８名とも，置くとすると手前左向きとした

に箸は食膳の手前に箸先を左に向けて配置されるが，伝統的な配膳を行うものは，小学生で78%，大学生で72%,中高年では83%で，全体として７割から８割が伝統的な取扱いをしていた。箸先の向きを逆向きとするものを含めると８割以上が膳の前部に配置していた。予備調査において利き手と箸先の向きとの関連について調べたが左手を利き手とするものの割合が低く，また，左手を利き手とするものも箸先は左を向けているものがすべてであったため，今回のアンケートにおいては，利き手については検討を加えなかった。一方，大学生，中高年では食事間に箸を置くことがないとするものの割合が７～９%あった。しかし，これらの者についてもそのほとんどは置くとすると手前左向きにおく伝統的な置き方をするとしていた。茶碗の上に乗せる，つまり渡し箸を行うとするものは，大学生に多く，小学生，中学生ではわずかであった。渡し箸は，嫌い箸の中でも教わった

とする割合がいずれの年齢層においても低く，また伝承したいとする割合も低かった。このことから，渡し箸が箸の作法としてあまり意識されなくなってきているものと考えられる。

（3） 食事規範について教わった経験のある者の割合およびその伝承の必要性に対する意識

14項目の食事規範について，小学生で教わった経験があるものの割合を図3に示した。14項目中

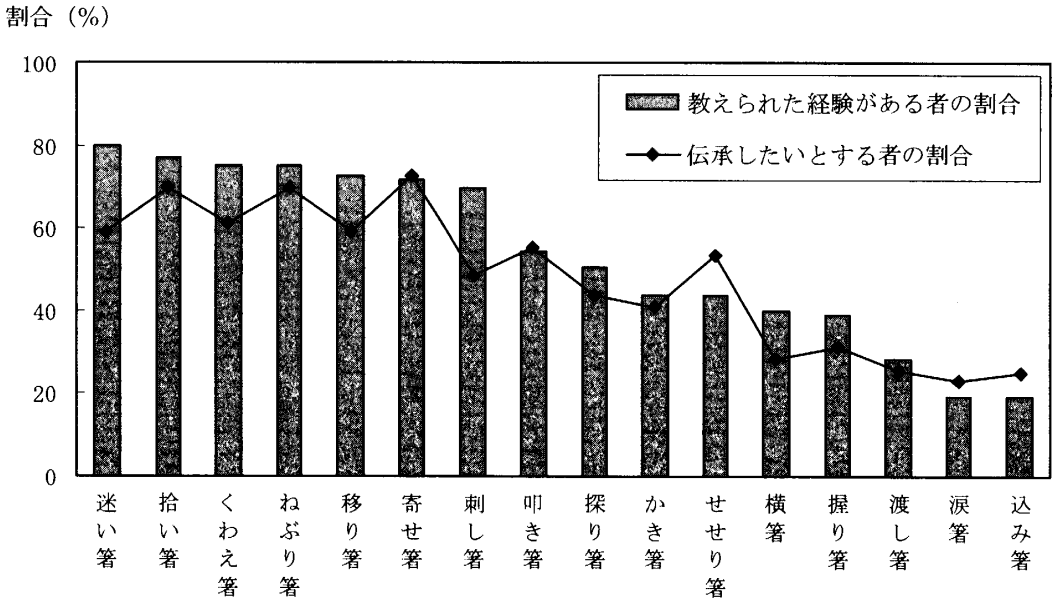

図3．各嫌い箸について教えられた経験がある者の割合およびその伝承意識について　ー中高年ー

10項目は半数以上の小学生が教えられたことがあると回答していた。このうち，肘をついて食べない，挨拶をする，口に入れたまましゃべらないの3項目については7割以上が教えられた経験を持っており，また，表2に見られるようにこれらの規範を98%が家庭で教えられていることから，食事に関する最も基本的なしつけととらえられていることがわかる。次いで箸の持ち方・使い方について7割弱が教えられたことがあると答えた。女子短大生を対象に行った箸の持ち方の指導を受けた年齢の調査において，伝統型の持ち方をしているもののうち約90%が7歳までに指導されていると向井ら[7]は述べている。また，向井らは箸の持ち方に正しい，間違いの別はなく，伝統的な持ち方

表2　食事作法を指導した人

指導した人	人数	割合（%）
親	185	74.9
祖父母	17	6.9
先生	4	1.6
その他	3	1.2
教わったことがない	38	15.4
計	247	100.0

無回答者10名は除く

であるか，そうでないかがあると指摘しているが，本調査結果は，伝統的箸の持ち方へのこだわりがやはり高いことを示していると思われる。

各食事規範に関して，よく教わるものを2点，教わったことがあるものを1点として小学生全体での合計点を出し，これを全人数で除したときの割合を教えられた頻度を考慮した指標として同じく図4に示した。食事規範の中で，上述の3項目は教えられる頻度も高いことがわかった。

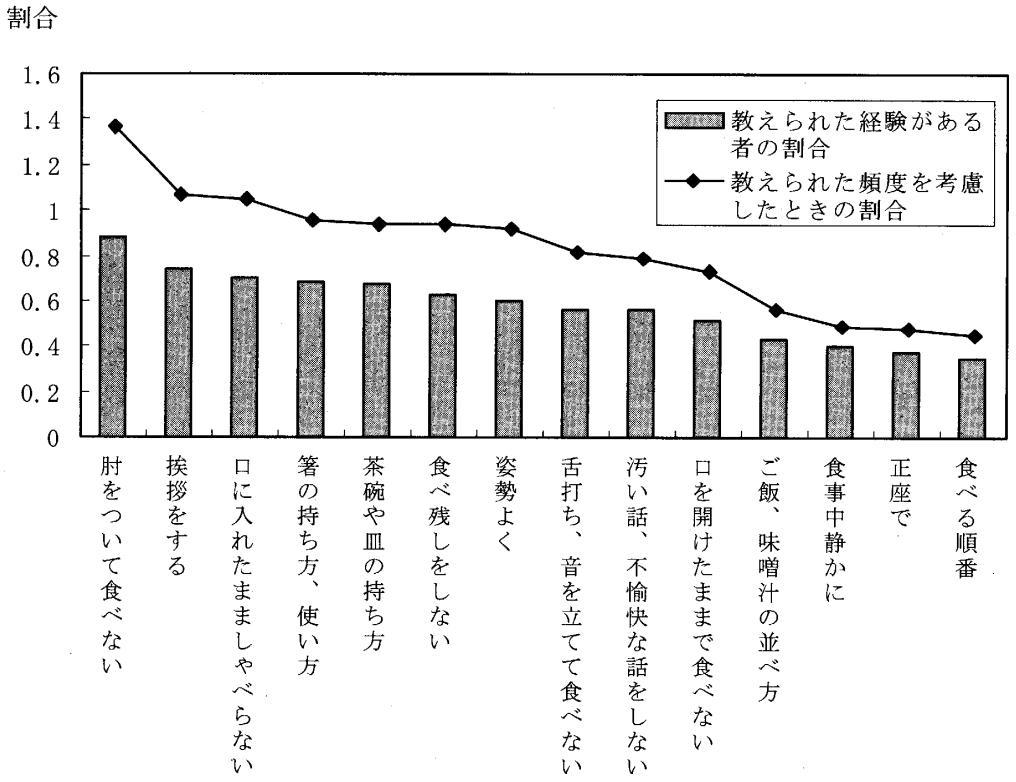

図4．各食事規範について教えられた経験がある者の割合　－小学生－

指導されたことがある者の割合：よく教わるあるいは教えられたことがある人数／全人数
指導された頻度を考慮したときの割合：(よく教わる者の人数×2＋教えられたことがある者の人数×1)／全人数

次に大学生および中高年について，これらの食事規範を教わった経験がある者の割合，また，伝承したいとする者の割合を図5に示した。教えられた食事規範は，正座を除いて見ると，上位6番目までに含まれる項目は大学生，中高年で一致しており，肘をついて食べない，口に食べ物を入れた入れたまましゃべらない，箸の持ち方使い方，挨拶をする，食べ残しをしない，茶碗や皿の持ち方であり，小学生の結果ともよく一致していた。肘をついて食べないは，いずれの対象群でも最も教えられた経験を持つ者の割合が高く8割から9割で，その他の5項目も6割から7割が教えられた経験を持ち，中高年世代，あるいは現大学生が教えられてきた内容と小学生が現在教えられている内容にあまり違いはないことがわかる。言い換えると，保護者世代は，自分たちが食生活に関し

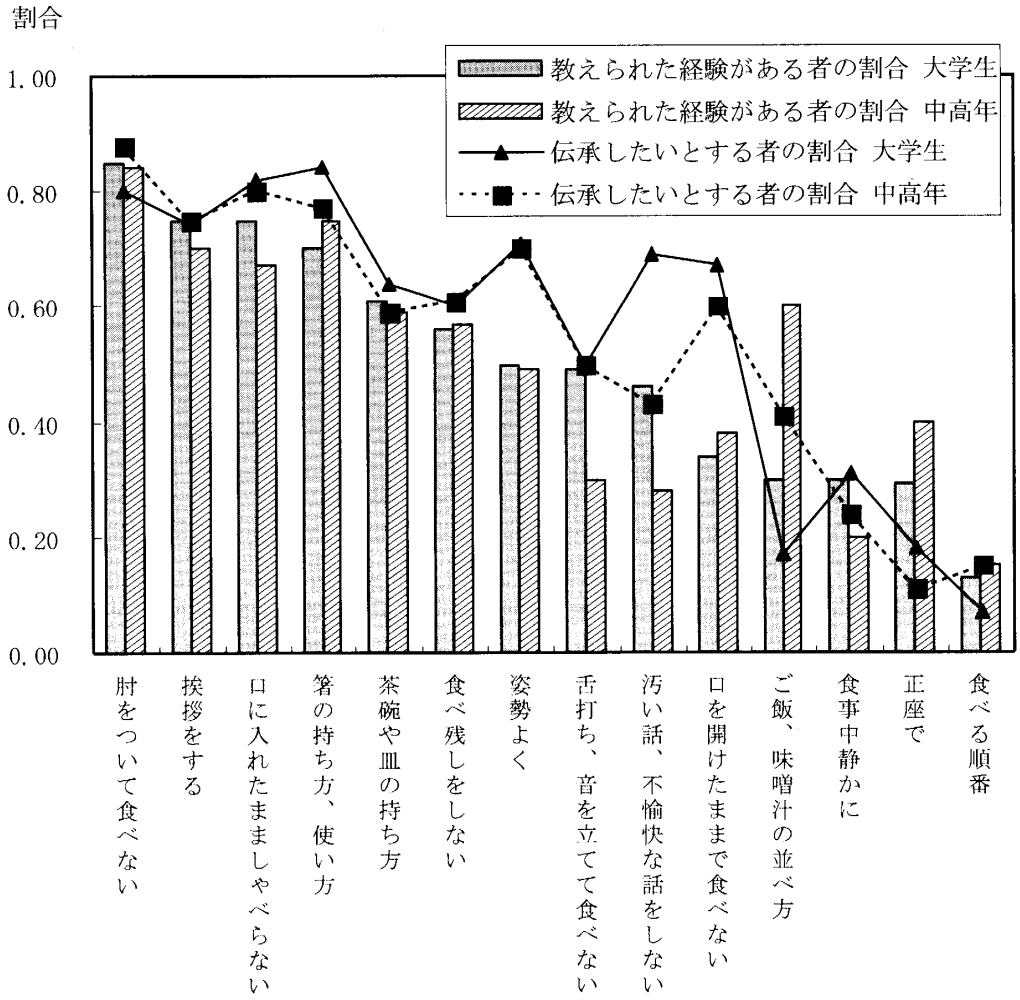

図5．各食事規範について教えられた経験がある者の割合および伝承意識について　ー大学生および中高年ー

て教えられてきた内容を教えているとも言える。これらの項目の中で，椅子を用いないで畳や床に座って食事をする場合には正座で食事をするという項目については，中高年では6割がそのように教えられたとする一方で，大学生では3割，小学生でも約4割と低く，現在，食事は正座というしつけは薄らいできている。このことは，食事に椅子とテーブルを用いる家庭が増加してきていることも関係していると思われる。また，食事中は静かにという規範は，食事を家族の団欒や人との交流の場とする現代の考え方に見られるように，強く求められる規範ではないと考えられる。ご飯や味噌汁の並べ方（配膳の仕方）や食べる順序はいずれの世代でも教えられたとする者の割合は低い。野林[8]は，作法とマナーとを明確に線引きすることは不可能であろうが，かといって全く同一であるとも言えないと述べている。共食を円滑にし，他者に不快感を与えないものをマナーと考えると，挨拶をする，肘をついて食べない，口に食べ物をいれたまましゃべらないなどのマナー的要素の高いものの割合が高く，配膳の仕方や食べる順序などの食文化や作法的要素が高い項目が教えられて

いる割合が低いと考えられる。このことは，現代の食事規範に作法的要素よりマナーを求める傾向にあること示していると思われる。

各項目について，伝承したいとするか否かを質問した結果は，２項目を除いて大学生，中高年でよく一致した傾向を示し，教えられた経験の高い項目で伝承したいとする割合が高かった。大学生と，中高年で伝承したいとする割合が20%以上異なっていた項目は，教えられた経験のある者の割合が異なる項目で，その経験の高さが伝承したいとする割合を高めていると思われる。

まとめ

食文化の伝承の観点から，食生活の規範に関わる事項がどの程度教えられ，それらの規範は次世代にも伝承したいと捉えられているかを調べることを目的に嫌い箸16種および食事時に見られる規範14項目についてアンケート調査を行った結果，いずれの世代でも教えられた経験を持つ者の割合が高い項目では，伝承したいとする割合も高いこと，また食事規範の中ではマナー的要素の高いものが指導された経験が高く，伝承したいとする者の割合も高いことがわかった。現代の日本人の食事様式の多様化，また価値観の多様化により，食事規範は変化していくと思われるが，上述の結果は，孤食や個食が増加しつつある現代にあってもなお，共食を円滑にする現代に適合した規範を求める方向にあることを示しているのではないかと考える。

謝辞

本研究に際し，アンケート調査にご協力をいただきました方々に深く感謝申し上げます。

文献

1）五十嵐脩，唯是康彦他（1992）食生活論－現代の食生活の意義・将来像の多面的解析－，調理栄養教育公社，東京，38-39
2）厚生省保健医療局健康増進栄養課（1995）平成７年版国民栄養の現状（平成５年国民栄養調査成績），第一出版，東京，70
3）向井由紀子，橋本慶子（1978）箸の使い勝手について－箸の持ち方，家政誌，29，467-473
4）向井由紀子，橋本慶子（1981）箸の使い勝手について－箸の持ち方（その２），家政誌，32，622-627
5）向井由紀子，橋本慶子（1983）箸の使い勝手について－箸の持ち方（その３），家政誌，34，269-275
6）石下直道（1999）食の文化５　色の情報化，農山漁村文化協会，東京，398-413
7）向井由紀子，橋本慶子（2001）ものと人間の文化史102箸，法政大学出版局，東京，166-169
8）野林厚志（2001）「食事作法の起源」を考える，vesta，41，42-46